

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 15 日現在

機関番号：34315

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2011～2016

課題番号：23521005

研究課題名(和文) 韓国、米国、日本在住中国朝鮮族のネットワーク化に関する文化人類学的研究

研究課題名(英文) Anthropological research on the Networking of Korean Chinese in Korea, USA and Japan

研究代表者

原尻 英樹 (Harajiri, Hideki)

立命館大学・産業社会学部・教授

研究者番号：70231537

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,000,000円

研究成果の概要(和文)：中国朝鮮族を事例として、そのトランスナショナルな移動の実態を明らかにして、その動きの歴史的な意味を解明し、かつ、現代世界におけるトランスナショナリズムの意味について考察することが研究目的であり、これに、旧来のエスニシティ論、マイノリティ論、国民国家論、前近代文化の意味論、東アジアにおける移民史等も参照しながら、分析をすすめる。

考察内容をまとめると、1. 火田に基づく移動と水田耕作農業に基づく定住、これら二つのハビトゥス、2. 朝鮮の伝統的人間関係である契に基づく、集団化、3. 農作業と同型の運動になっている踊りによる、身体的コミュニケーションとそれに基づく人間関係、になる。

研究成果の概要(英文)： I study Korean Chinese, as one case study of transnational relocation through which actual human movement is clarified. The historical and up-date meanings of trans-nationalism is the purpose of this study. Studies on ethnicities, minorities, nation-states, meanings of pre-modern cultures and slash-and-burn agriculture, and immigrant history of East Asia are referred.

For the better understanding of relocation of Korean Chinese, next three research topics are clarified: 1. habitus of relocation based on slash-and-burn agriculture and settlement based on paddy agriculture, 2. Korean traditional human relations based on kye or agricultural association and kye grouping, 3. Korean dancing through which Korean communicate among others. Body culture based on pre-modern Korean culture has a special meanings for Korean Chinese. And it aids human grouping of Korean Chinese.

研究分野：文化人類学

キーワード：中国朝鮮族 トランスナショナリズム 前近代文化 近代文化 移動 身体文化 文明志向

1. 研究開始当初の背景

アメリカのコリアタウンについては、長年研究を続けており、中国朝鮮族もロスアンゼルス、ニューヨークのコリアンタウンに居住しているので、現地事情を十分に理解できているので、調査にとりかかりやすかった。因みに、コリアンタウンでの長期滞在によるフィールドワークは現在まで筆者以外、世界中にほとんどいない。さらに、韓国在住朝鮮族の調査も前年に行い、アメリカ、韓国、日本の朝鮮族の比較研究のためのデータは十分収集してきた。

2. 研究の目的

中国朝鮮族を事例として、そのトランスナショナルな移動の実態を明らかにして、その動きの歴史的な意味を解明し、かつ、現代世界におけるトランスナショナリズムの意味について考察すること

3. 研究の方法

基本的にはトランスナショナリズムを研究の基軸に置く。これに、旧来のエスニシティ論、マイノリティ論、国民国家論、前近代文化の意味論、東アジアにおける移民史等も参照しながら、分析をすすめる。

4. 研究成果

まず、データのみにみた場合、これまでの中国朝鮮族研究は、朝鮮族ムラの調査研究、出稼ぎ先である韓国の朝鮮族の実態調査、主に留学から定着過程にある日本在住朝鮮族の実態調査、これらに限定されている。私は、移動先である、アメリカ(サイパンも含む)、韓国、日本における朝鮮族の生活実態調査、移動前の居住地である、長春、延辺での生活史調査、近年の移動先である、青島、深圳における生活実態調査を行った。このような朝鮮族についての総合的な学術調査・研究は、これまで誰も着手していない。

まず、歴史的に考えるために、中国での調査の成果を踏まえて、朝鮮族の歴史を考え、それに基づいて今日のトランスナショナルな動きの意味について考えることにする。

結論を先取りするような形になるが、朝鮮族の歴史性を考える上で、次にあげる三つの項目が重要になると考えられる、(1)火田(焼畑の意)に基づく移動と水田耕作農業に基づく定住、これら二つのハビトゥス、(2)朝鮮の伝統的人間関係である契に基づく、集団化、契とは日本の講と同種である、(3)農作業と同型の運動になっている踊りによる、身体的コミュニケーションとそれに基づく人間関係、以上である。

歴史的にみた場合、中国の明と清の時代から朝鮮人の移動がみられ、これらの人々は、火田による移動民であったといえる。火田による移動には、現地の人々との関係は必要とされず、これによって得られる穀物等は、そのまま火田民の収入になった。満洲国建国以

前において、もともとは火田を行っていた朝鮮人は、より多い収穫が可能になる水田耕作を実験的に試行して、最終的に水田耕作に成功した。これを知った植民地行政の方は(満洲の方ではなく、朝鮮総督府の方)朝鮮人が満洲開拓に使えることが分かり、日本人の移住が十分でないこともあり、朝鮮人移住を推進させようと考えた。満洲の水田耕作は、寒冷地ということもあり、そのまま日本のやり方でできるはずがなく、一部、朝鮮人の火畑のやり方を取り入れながら、生産性をあげる日本の方式を導入することで成り立っていった。水田耕作への移行には、朝鮮人は、一部火田を山でやりながら、水田耕作を行っており、火田が完全になくすることはなかった。つまり、一種矛盾するようであるが、移動と定住は、朝鮮人にとって二つの文化伝統として、どちらも受け継がれていた。

当事者である朝鮮族、そしてその近辺で生活を共有していた漢族にとって、朝鮮族は、移動を常としており、旅支度は朝鮮族にとってごく普通の日常であった。農閑期になれば、どこかに出稼ぎに行くのが朝鮮族の日常であった。結果として、中国全土どこにでも朝鮮族は出かけて行った。ひとつの事例として考えてみると、今日、朝鮮族料理として知られている串焼きは、ウイグルからもたらされ、朝鮮族が作り方を改良して、朝鮮族料理になっている。

今日的にみると、韓国、日本、アメリカ等への移動は、それまでの中国国内での移動の延長線上にある移動であり、その範囲が伸びただけだととれる。これと対局にある定住であるが、何らかのモチベーションによって移動した後は、移動先での適応の過程が始まり、環境に適応しながら、生活戦略を構築するとともに、その地にあった方策を考え、実践していく。これは、定住のハビトゥスによって、可能になるといえる。後に論じるように、アメリカ、日本等においては、適応戦略を展開して、定住のハビトゥスが移動のハビトゥスよりも前面に出されている。

次に契についてである。満洲国建国後に朝鮮人を受け入れる際に、満洲国行政は、朝鮮人の生活実態等について十分に研究しており、朝鮮人が、そのムラにおいて契を形成していることを知っていた。そして、人工的に日本人官僚が作った契に朝鮮人を入れることで、朝鮮人管理を円滑にしようと考えた。この考えは、実際にその通りに実現され、朝鮮人の大半は、自らが満洲で生きて行くためには契に加入する必要があると考え、その通りにしていった。

満洲国時代が終わった後は、朝鮮族のムラごとに契が存しており、この契をもとにして、朝鮮人の相互扶助である、プマシ、ツレも形成された。その後、中華人民共和国の行政に基づく、ムラの組織が作られていったが、実際はこの契の人間関係によってこれらの組織も運営されていた。しかしながら、もとも

とは契と呼ばれていた人間関係も、行政組織名称の方が一般化され、各々の朝鮮族ムラにおいて、どの時代の組織かで呼び方が違ってきたりした。現在は、契といった呼び方はほとんどのムラでは残っていない。

ところが、ムラの運動会等の行事の際には、契の人間関係が出ている。朝鮮半島南部の全羅道、済州道においては、カプチャンという同年齢集団が組織化されており、それが契の単位になっている。咸鏡道においてこのカプチャンがあったかなかったは不明であるが、契による集団化を考える際には、年齢が重要な意味をもっている。ムラの行事の際にも、現代では、若者集団、中年壮年集団、年配集団が形成されている。年齢による集団分けである。一種儒教的にもみえるが、儒教が一般庶民、常民に入ったのはおおよそ150年ぐらい前であるが、契等の集団はそれ以前から存していたので、一応儒教とは切り離して考えるべきである。しかしながら、儒教の年齢別の考え方にも合致するのであって、旧来の伝統が儒教に照らしても意味があることになる。朝鮮族ムラにおいては、朝鮮族がお互いに扶助するのは当たり前であって、共同体の存続基盤にこの契はなっていた。

契そのものは存続していないが、都市部に出てきた朝鮮族の老人たちが組織化しているのが、老人協会である。これは朝鮮族の老人会であるが、朝鮮族が居住しているところにはどこにもこの老人協会がある。この老人協会は、朝鮮族ムラを週一回の集まりの際に現出させ、朝鮮族の共同体を思い起こさせる役割を担っている。つまり、昔日の契の集まりと同じ役割があることになる。

この集まりの際に必ず催され、かつ重要な意味を持っていると考えられるのが、朝鮮族の踊りである。朝鮮人にとって踊りを踊ることは、催しもの際には必須であって、昔日から現在まで、これは引き継がれている。歌って踊るのが普通なのが朝鮮族であるが、中国でマジョリティを形成している漢族には、この踊りは共有化されておらず、朝鮮族にとって、自分たちの独自性を主張できる重要性もこの踊りにはある。

朝鮮族にとっては、朝鮮族ムラでごく日常的に踊りは踊られており、その文化伝統が老人会でも引き継がれているだけのことである。この踊りは、毎日の労働であった農作業と同じ形で体を動かし、農作業で共同化している身体によるコミュニケーションが、この踊りに具現化されている。

朝鮮族の「伝統舞踊」は、若い者たち等の場合、ムラではなく、民族舞踊の学校である場合があるので、老人協会では指導の立場にあるような若手は、老人たちとは違う踊り方をしている。この踊り方は、北朝鮮で踊られているやり方がそのまま反映されており、崔承姫が創案し、北朝鮮で広めたやり方で行われている。崔承姫は、戦前、朝鮮舞踊を広めた世界的な有名人であるが、実のところ、やっ

ていた舞踊は、朝鮮伝統舞踊ではなく、モダンバレエであった。石井獺の弟子になった崔承姫は、モダンバレエの専門家であったが、自ら出し物に、朝鮮の踊りの色彩を入れる踊りを始めたために、朝鮮舞踊の専門家とみなされることになった。こういった踊りなので、老人たちが踊る、朝鮮の伝統的な民俗舞踊とは踊り方が異なっている。

若手の踊り方は、一種スポーツ的であり、身体を動かすときに、体軸をまず安定させてから、手足を動かすやり方になっている。老人たちの場合、農作業で鍬を動かすように、身体という道具を動かすので、指先から動き、その指先に腕や足が後からついていく動かし方をしている。一日中農作業を継続するためには、まず疲労しないようにしなければならない。そのために、鋤を上にかかげて、その鋤に先導されて、手足がついていくようなやり方、つまり重力で鍬を土に入れるやり方をするので、体内のエネルギーをなるべく使わないやり方をしている。

このやり方で踊りを踊ると、手がどこまでも伸びていくように見え、スポーツ的な動かし方よりも優雅にみえる。朝鮮族の老人たちにとってこれが自然な踊り方であって、北朝鮮の踊り方は、一種「プロ」のやり方に映っている。朝鮮族ムラでの生活経験のある朝鮮族にとっては、老人たちの踊りが朝鮮族の踊りであり、このような身体の動かし方が自然に映っている。

ここまでで、朝鮮族の伝統文化について記述してきたが、外国に出て行っている朝鮮族にとって、このような伝統文化にどのような意味があるのかについて、次に考察する。

朝鮮族の海外居住地は、場所ごとに事情が異なっている。韓国には、肉体労働を中心とした労働、よって、労働の報酬である金銭目的で渡航している朝鮮族がその大半である。アメリカは、2000年代までは密航で渡航したものが大半であり、単に不法滞在ではなく、密入国者なので、金銭を中心とした生活戦略が必要であり、それに基づいた生活設計がなされている。日本には労働目的の朝鮮族もいるのはいるが、その大半は、留学生であり、留学後そのまま日本に滞在して、日本社会に適應している朝鮮族もいる。

韓国における朝鮮族は、現金キャッシュ目的での渡航であり、近年、渡航自体が容易にできることも手伝い、朝鮮族にとって気軽にいける外国になっている。韓国側にとっては、もともとの同胞といよりも、外国人労働者であって、それが朝鮮族になっているだけである。韓国語がある程度できていれば、一応、肉体労働等を探すことには困難はないが、実質的な実入りは、それほどではなく、しかも、事実上の外国生活であるので、ストレスが多く、朝鮮族労働者は、事実上その日暮らしの労働者生活をしている場合が、相当数見受けられる。ここには、適應のための、未来の生活のための適應戦略などは、それほど見いだ

すことはできない。同じ地域出身（例えば延辺など）の者たちがゆるやかなネットワークを形成していることが見いだされる程度であり、韓国社会で今後どのように生き残っていくかといった実質的な生活戦略などは、それほど共有化されているとはいえない。これは朝鮮族に朝鮮族間の連携、連帯を求めたりしているが、自分達だけで何らかの動きを作り出すといったレベルにはまだ到達しているとはいえないだろう。このような生活実態に合っ、て、伝統文化などがそれほど重要な意味があるとは考えにくい、が、サッカーチームを創設し、朝鮮族リーグを始めたり、中国内の朝鮮族と同様に、運動会を催したりといったことは行われている。身体、運動といった伝統文化は韓国在住朝鮮族にとっても重要な意味があることが分かる。

1970年代頃までは、すべての朝鮮族ムラにおいて、山神が祀られており、この信仰に基づく祭りも行われていた。しかしながら、宗教色は朝鮮族にとって、時間が経過すればするほど、大きな意味がなくなっていった。かわって、満洲国時代に植民地行政の手で始められた運動会は、どの朝鮮族ムラでも盛大に行われ、ムラの祭りとしての意味がより大きくなっていった。この延長線上で、朝鮮族が居住するすべての場所で運動会は催されている。つまり、支配者による文化を逆手にとって、自分たちのための文化に変えていったといえる。

朝鮮族ムラでの運動会のみならず、外国での運動会においても、身体運動の方法は、学校でもスポーツを学んでいることも関係し、恐らく当初はムラビト全員が農民だった際には、農業的な運動が一般的であったと想像できるが、現在ではスポーツ的な運動になっている。但し、これと異なるのは、やはり、老人たちを中心とした人々による踊りである。この踊りによって、朝鮮族は自らの文化伝統を確認することが可能になっている。また、運動自体はスポーツであるが、中国国内でも朝鮮族がサッカーに強いことは知れ渡っており、韓国、アメリカ、日本いずれにおいても、サッカーをやることは朝鮮族の証明にもなっている。

先述したように、日本在住朝鮮族はその大半が留学生である。歴史的にみた場合、日中国交回復後、中国からの国費留学生が来日し出したが、当時の中国には日本語をできる者が限られており、実際日本語を学べるころも、朝鮮族等を除くとほとんどなかった。このような事情があったため、初期の国費留学生には朝鮮族が多数含まれていた。朝鮮族の場合、中華人民共和国の国民になってから、朝鮮族の民族学校で外国語を学ぶ際、当初はロシア語が採用されたが、これはほんのわずかの間であり、朝鮮族自身ができる外国語であった日本語が一般化していった。朝鮮族の学校では日本語教育が一般的であったので、日本語のできる朝鮮族が相当いたのであり、

これによって、国費留学生に朝鮮族が選ばれることになっていった。国費留学生の留学先は、帝大系の大学を中心とした一流大学であり、この人脈は、朝鮮族の延辺大学に、現在でもつながっている。

80年代に始まった朝鮮族の私費留学は、このエリート層の留学生とは別であり、人脈はつながっていない。今日の留学生は、この私費留学生がその大半になっている。これらの留学生の大半は、上記のエリート留学生とは異なり、日本の大学事情を十分知らずに、留学しており、実際に話を聞いてみると、どの大学かはほとんど重視されていないことが分かる。これらの留学生にとって、日本に行くことが目的であって、どこの大学に入学するかはそれほど重要ではない。もちろん、朝鮮族のエリート留学生もいるのはいるのであって、一部のこのような学生の場合、何をどこで学ぶか等については中国で十分に検討してから来日している。

大半の私費留学生のあり方は、留学が一般化する以前の朝鮮族の移動のやり方と似ており、とにかく、「行くこと」が重視されている。しかしながら、留学当初とは異なり、大学卒業段階になると、日本の大学事情、日本社会、日本文化について十分な知識をもち、よく理解できるようになっている。卒業後にこれを利用して、日本での戦略的な生活を始めている。

アメリカの場合、一部の投資移民を除くと、2000年代までは、密入国、密航が朝鮮族の渡航方法であった。実をいえば、渡航形態としては、全く異なる、日本とアメリカであるが、似た側面がある。それは、両者とも、「とにかく行く、行けば何とかなる」といった点である。アメリカへの密航の場合、ブローカーに多額の借金をしてから渡航するのであり、そのためにアメリカに渡ってから、少なくとも2,3年間は謝金返済期間が必要になる。英語もできない、アメリカの事情も知らない、どの程度の金額をもらえるかの見通しもない、このような条件で密航している。常識的に考えて、相当なリスクであり、もし、病気にでもなったら、自分の中国での生活もすべて破綻してしまう可能性さえある。

中国では別に何か経済上の問題があるのでもなく、そのまま中国にいれば、何の問題もなく、生活を送れている人がなぜ密航までしてアメリカに行かなければならないのか。一応、名目上は、ドルと元とのレート差に基づく、金儲けのため、というのがよく言われているお話であるが、では何のための金なのか、何にその金を使うのか、こういったことは一切説明されない。つまり、「金のため」というのは、中国人用の「分かりやすい話」になっているだけであって、渡航目的には別の何かがあることになる。

日本への留学の場合、一応生活上のリスクは避けることができるが、密航の場合、生活上のリスクもある。ところが、両者の共通点

として、「とにかく行く」という行くこと自体が目的になっていることをあげることができる。韓国行きの場合、現金、キャッシュ獲得が目的であり、大半の韓国行きの朝鮮族の場合、人生設計その他はほとんど考えられていない。このような無計画性だと、アメリカではサバイバルが困難になる。ところが、渡航前の段階ではアメリカの事情を知ることできないのであるから、計画を立てることもできないだろう。つまり、密航者の生活設計は渡航後に作られているとみることができる。「とにかく行く」が最初であり、渡航後に生活設計について考えるというのは、日本行の朝鮮族と同様になっている。

さて、ここで興味深い事例を検討することにする。これは、日本の植民地になる前の朝鮮からハワイに渡航したプランテーション農業のための「移民」である。当初は移民ではなく単なる労働目的であったが、事実上後には移民になったので、「移民」と表記しておく。朝鮮全土から募集されてハワイに向かった朝鮮人は、日本からの人々と異なり、出身のムラが同じであったわけでもなく、個人のレベルで渡航した人々であった。これらの人々は、日本人、中国人同様にプランテーション農業に従事したが、これらの人々とは根本的に異なる点があった。朝鮮人の場合、プランテーション農業をしばらくすると、すぐにホノルルという都市に出て行ったのである。ここで、朝鮮人は都市生活に必要な仕事を獲得し、そのままホノルルで生活を続けた。これと事例として似ているのは、満洲の首都新京に、朝鮮人ムラから出て行った人々である。日本の初等教育を修了した一部の朝鮮人は、新たな仕事のチャンスを探求めて、新京に出て行った。もちろん、大半の朝鮮人にあてなどなかった。とにかく、都市に出て行ってどこかで機会を見つけ出そうと考えた。

今日的にみると、フロンティアスピリットのようにもみえるが、当事者の朝鮮人にとって、「行けば何とかなる」であり、ホノルルも新京も、「文明」の中心であり、文明を目指す生活がより良いと考えられていた。この延長線上に、今日の、アメリカ行きも日本行きもあると考えられる。朝鮮族にとって、アジアにおける文明の中心は日本であり、韓国ではない。そして世界の文明の中心はアメリカである。実際、日本留学で日本にいた朝鮮族は、特別の仕事でもない限り、韓国に行こうとはしない。常に文明の中心にいたいのである。

朝鮮族は、前近代の伝統文化に基づく人間関係を維持している。これは済州島人が済州島における人間関係を日本においても維持してきたことと似ている。しかしながら、済州島の方は、もともとからのムラがもともとからのムラビトによって維持され、そのムラビトが日本に渡ってから、同じムラビトと関わっているが、朝鮮族の場合、家族、父方・母方の親戚、同じムラの人々が新たなムラで

継続して関係を維持してきた面があるものの、満洲に来てから、新たな関わりが出来た面もあるのであり、旧来からのムラがそのまま継続したのではない。この違いの克服のために、農作業で共有している身体、身体文化という「実質性」を共同体維持の道具にしている。運動会、サッカーでなくとも、朝鮮族の人間関係作りには、今でも運動が色濃く存在しており、身体の共有化がより良い人間関係作りにつながっている。

歴史的に考えた場合、満洲国時代を通して、中華人民共和国時代において、近代性を朝鮮族は獲得している。この近代性には、「文明」志向が含まれている。前近代性と近代性の両方を併せ持つ朝鮮族は、ポスト近代の現状をこれらを使い分けながら、乗り越えて生きて行こうとしているといえよう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計3件)

Chenghao An and Hideki Harajiri 2017. A Study of Korean Chinese Culture: Transitions from Modern, Contemporary to Future Perspectives(1-10) VOLUME 27, Number 1-3 The Anthropologist: International Journal of Contemporary and Applied Studies of Man. ISSN 0972-0073

原尻英樹 2012 「中国朝鮮族の生活戦略：米国ニューヨークの事例より」(原文韓国語)『グローバル朝鮮族文化ネットワークと文化産業研究』亜細亜経済文化研究所 99 - 107

[学会発表](計1件)

[図書](計4件)

原尻英樹・金明美共編 2017『朝鮮半島と日本における東シナ海域文化：その基層文化と人々の生活』(原文韓国語) 民俗苑、382 (33 - 170, 338 - 340)

原尻英樹・金明美共編 2015『東シナ海域における朝鮮半島と日本列島：その基層文化と人々の生活』、かんよう出版、408 (28 - 183, 369 - 371)

[産業財産権]

出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：

出願年月日：
国内外の別：

取得状況（計0件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

原尻 英樹 (HARAJIRI, Hideki)
立命館大学・産業社会学部・教授
研究者番号：70231537

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：

(4) 研究協力者

()